

総 合 討 論

司会：青 山 亨

(鹿児島大学南太平洋海域研究センター)

(司会：青山) 総合討論をはじめさせていただきます。まず最初にお断りしておかなければならないことがあります。実は、台風が今晚から鹿児島に接近している関係で、東京から来られている清水先生と波多野先生は、大事をとってきょうの夕方の便でお帰りになります。したがって、この総合討論の途中で退席されざるをえないこととなりました。まことに残念なことです。この点をご了解いただきたく思います。そこで、このような事情でございますので、総合討論の前半では、フロアから、清水先生と波多野先生に対するコメントや質問をまず優先してだしていただくこととし、早瀬先生に対するコメントや質問は後半でだしていただくというかたちをとりたく思います。よろしくご協力願います。

それでは、フロアからのコメント、質問をお受けしたいと思います。

(フロア：中野) 南太平洋海域研究センターの中野です。南太平洋のことを多少うかがおうかと思えます。鈴木経勲という人がいますね。あの人について、どう評価されているのかうかがいたいのですが……。

(清水) 鈴木経勲という人のことを詳しく研究したことはないんですけど。鈴木経勲は、たまたま明治17年にマーシャル群島のラエ島で日本人の遺骨が発見されるという事件が起こって、外務省に勤めていたということだったと思いますけれども、調査のため、その島に派遣されたということです。その後『南洋探検実記』という本を書いて、南洋群島の奇妙な風俗などをいろいろ書いたというようなことで、南方・南洋に対する関心というものはもったようではありますけれども、その後、南進論者として、つまり、わたしがきょうお話したような対外思想としての南進論というところでは、あまり重要な役割を果たしていないんじゃないかな、という気がわたしはしてまして。評価といっても、南進論者としての評価ということはあまりしていないというふうにお答えしなければならぬのですが……。

(早瀬) わたしの発表が終わったあと、清水先生にいわれたことですが、「南進論」というのは思想的なもので、わたしが述べたロマンティズムをとまなうものというのは、「南進論」ではなくて、「南洋論」とか、きょうのシンポジウムのタイトルにある「南方関与」というようなあいまいな表現がふさわしいものです。このシンポジウムの前にも、波多野先生と「南方関与」を英語にどう訳そうかと相談していたところで、なかなかわかりにくい、困る名称なんです。「南進論」とい

うのは、政治的なものを多分に含んだ対外政策論、あるいは思想論であって、それに対して、南洋にかかわって、時流にのって、南洋に経済進出するとかは、また別のもので、狭義の「南進論」とは違うものだと思います。ですから、いまいった鈴木經勲とかは、そういった政治的イデオロギーをもって南洋を語ったという人じゃない、と理解すればいいんじゃないかと思います。

（司会：青山）いまのこちらからの回答でよろしいでしょうか。フロアのほうから、ほかにも清水先生に対する質問あるいはコメントございませんか。はい、お願いします。

（フロア：黒瀬）鹿児島経済大学の黒瀬と申します。清水先生のご報告とですね、さきほどの波多野先生とですね、かなり南進の捉え方に大きなギャップというようなものを、わたしは感じたのですが。清水先生は、明治南進論から第一次大戦を転換点として大きく変貌をとげる。それは、昭和期の大東亜共栄圏のすべてを準備した、というふうに太平洋戦争期を眺望された報告だったように思いますけれど、波多野先生の1920年代は、むしろ盟主論を阻害するといえますか、発展を妨げるというふうな捉え方をされてたように思うんですね。その点について大正期南進論といえますか、20年代の南進論というものをどういうふうにお考えですか。

（清水）わたしは波多野さんのご報告を聞いておまして、ちょっと思いましたけれど、対外思想と対外政策というものを区別して考えるべきだろうと思います。わたしがお話したのは、南進論という対外思想についての話でありまして、いちばん最初に申しあげましたように、南進論という議論が沸騰した時期は、近代日本史上3回ありました。第1回目は明治の中期くらいだった。それから2回目は第一次大戦期ぐらい、3回目が大東亜共栄圏時代であります。この3つの時期の対外思想としての南進論のロジックと、そのロジックを支えていた概念装置に着目してみると、だいたい明治末期から第一次大戦ぐらいに大きな転換点があって、その後は南進論のロジックの内容とか概念装置とかいうものは、大きく変化していないということを申しあげたわけです。これに対して、波多野さんのお話というのは、わたしはこういうふう聞いておりました。いわゆる対外政策というものは、基本的には、わたしがいちばん最初に申しあげました、近代日本史の磁場において圧倒的に優勢であった「国際性」の契機というものの影響を、やっぱり強く受けているのだというふうに思ったわけです。そういうものがございますから、盟主論にしても、アジア主義にしても、そうした思想の底流というものがあるにもかかわらず、具体的な政策として表われてくるときには、かなり国際的な情勢、あるいは世界の思想潮流というものに目配りをして、本来の主義主張を抑制する傾向がつけねにあったのだというふうには、わたしは波多野さんのご報告を聞いたわけです。ですから、わたしの話した南進論というものと、波多野さんの対外政策の変容・発展とは、基本的に少し議論の枠組みが違っている。しかし、必ずしも矛盾する議論じゃないというふうに、わたしは思いました。

(司会：青山) いま、フロアからご質問があったのは、清水先生のほうはすでに第一次大戦期に南進論の変化があって、それが第二次世界大戦期まで一定程度、つづいていったという、そういうことですね。それに対して、波多野先生のほうは1920年代というのは、じつはかなり盟主論というのは後退して、むしろ国際主義がでてきた。このふたつの考え方に少し違いがあるんじゃないか、というご指摘でした。いま、清水先生のほうからご回答がありましたけれど、波多野先生のほうからどうでしょうか。

(波多野) そうですね。いま、清水さんからうまく答えていただきましたのですが、わたしもちょっとことばが足りないところがありました。わたしが20年代のことでお話ししたのは、国際環境とそれに対応する対外政策の流れ、その両者に結びついたものとしての対外思想という観点から申しあげたわけでありまして。そういう意味で、この20年代の南進論というものは、いわば、ワシントン体制と当時いわれましたけれども、それを補完するような経済主義的で平和的な、つまり経済を中心に南方にでていく、しかも手段としても非常に平和的な手段をとっていく。これを仮に「国際主義」を志向する世界的な流れ、ワシントン体制の枠組みのなかでの政策の流れとするならば、他方ではやはり反ワシントン体制といえますか、そうした流れを否定するような流れも、けっして途絶えたわけではないわけでありまして。しかし、主流であったのは、国際主義的な、いま申しあげたような流れではなかったのかということでありまして。

(司会：青山) いまのご質問は、わたしも興味深かったです。そうすると、波多野先生のほうは、どちらかというとい国際政治のなかでの日本の南進論の表われ方であり、それに対して清水先生のほうは、むしろ内発的な日本思想としての発展である、表われ方であると。そう理解してよろしいでしょうか。

(波多野) そうですね。現実的な国際環境、対外政策というものは、国際環境とともに、変化に応じてある、というふうにしますならば、現実の政策としては、そういう表われ方をしていたということだろうと思います。

(司会：青山) いまご質問の方は、いまの回答でどうでしょうか。そのほかにご質問、コメントをいただきたいと思いますが……はい、お願いします。

(フロア：田島) あの……、議論の枠組みですね。「南方」の概念なんですけれども、どうもお聞きしていると、もっぱら東南アジアの島嶼部を対象にしている。で、おそらく戦前は「南方」という概念はそうだったんだろうと思われまして、主催の南太平洋海域研究センターとしては、そ

の「南方」の概念を主として太平洋の諸島のことを意味して使っているのではないかと思います。で、そのきょうの議論の内容のようなことが、太平洋に対しても、ほとんど同じように考えられるのか、それとも太平洋の諸島を考えた場合に、なにか違うものがあるのか、そのあたりちょっと教えていただきたいと思います。

(清水) わたしは、そのへんを区別してお話したつもりでいるのですが、どうもうまく伝わらなかったようで、説明の仕方が悪かったんだと思います。実は、わたしはそのことを非常に強く意識しておりまして、明治期の南進論と第一次大戦後に変った南進論というのは、対象地域がちょっとずれているということを申しあげたかったのです。最後、時間がなかったものですから、端折ってしまって、うまく伝わらなかったのかと思いますが、実はそこところが非常に重要なポイントです。明治中期の第1期の南進論の主要な対象地域というのは、やはり太平洋の諸島なわけです。当時の南進論者の書いたものをみますと、アジア大陸と太平洋地域とははっきりと分けて考えております。それは、実は当時の西洋流の地理認識だったのです。で、その西洋流の地理認識で、アジア大陸というものと太平洋というものを分けて、実は違う地域だと考えております。そこにも、明治中期の南進論者がアジア主義的な色彩が薄かった理由があるんだと思うのです。彼らが、なぜ太平洋に目を向けたのかと申しますと、当時の日本に強く存在したアジアとの運命共同性を否定しなかったということがあったと思います。そういうものとは別の一種の海洋国家論を展開するうえで、アジアとは異なる地域としての太平洋というものが構想されているというふう思うのです。それが、実は福沢諭吉の「脱亜論」の重要なモチーフのひとつだったといえます。「脱亜論」以後の福沢というのは、要するにアジアとの、朝鮮、中国との運命共同性の否定ということから出発しているわけで、一種の海洋国家論なわけです。そういう意味で、明治中期の南進論者はアジア主義的色彩が薄くて、脱亜的なものに親縁性をもっているということがいえます。しかし、この「南進論」の対象地域が、しだいにアジアというふうなものとして意識されるようになってきたというところが、ポイントなのであります。実は、現在の東南アジアに関心が向いてくるのは第一次大戦以降ですけれども、その前でも、現在の東南アジアにおける島嶼部の東南アジアに対しては、南進論者は関心をもっていたわけです。しかし、島嶼部の東南アジアというものの地理的な位置については、それはアジアにあるんじゃないくて、太平洋にあるんだと、大洋州にあるんだと、こういう考えをもっていたんですね。それが第一次大戦ぐらいから、東南アジアに目が向いてくるにつれて、島嶼部東南アジアも、大陸部東南アジアも、同じいっしょの地域だと、これを一括りにして、東南アジアとよぶという地理認識が生れたんですね。つまり、いままでぜんぜん別の地域だと考えていた島嶼部東南アジアというものを、大陸部東南アジアとくっつけてアジアにしてしまった。このことは、非常に注目すべきことです。そして、アジアは日本の勢力圏だから、この東南アジアにも日本は勢力を及ぼして当然だという考えが非常に強くでてきた。そこに、第一次大戦期における南進論のアジア主義的な変貌というものが象徴されているんじゃないか。こういう話をしたつもりでいたんです。

(司会：青山) 波多野先生のほうからどうでしょうか。

(波多野) わたしは、「南洋」あるいは「南方」ということばを使ったんですが、とくに意識的にはないわけではありますが、ひとことだけ申しあげておきますと、「南方」ということばが公式の国策の文書に表われてくるのは、1930年代の半ばぐらいであります。これは軍の用語でありまして、だいたい蘭印、オランダ領東インドを中心にした、資源の豊富な地域を中心にした島嶼部あるいは半島部東南アジアを指していただろうというふうに思います。その後、開戦前後には「南方共栄圏」ということばも登場します。つまり、資源の獲得対象地域としての性格が、この「南方」ということばには表われてくるように思われます。それまでは、つまり30年代半ばまでは、「南洋」ということばを使うほうが多かったように思います。

(司会：青山) いまの回答でよろしいでしょうか。

(フロア：田島) はい。説明をそういうふうにされたんだと、そこはよくわかりました。ですが、とくに、第一次大戦後、ドイツ領から日本の委任統治領になったミクロネシアあたりの捉え方ですね。そこに、なにか特殊な新しい面があるとみていいのか、それとも基本的にいわゆる島嶼部の東南アジアの一部と基本的には同じだと考えていいのか。そこを……。

(清水) おそらく、日本にとって東南アジアが第一次大戦後にひとつの地域としてでてくるきっかけは、やはり旧ドイツ領南洋群島の委任統治領としての領有であったであろうと思います。あのころ「内南洋」とか「外南洋」といういい方をするようになります。これは、はっきりとした根拠があっていつているわけではありませんけれども、むしろ教えていただきたいのですけれども、なぜ「内南洋」とよび「外南洋」とよぶようになったのかと。これは東南アジアに目が向くきっかけというのは、要するに独領南洋群島を領有したということで、ここに拠点をもったということですね。その結果、この時期から南進の拠点思想といえますか、そういう考え方が非常に急速にでてくるわけです。南洋群島と台湾というものを基地、拠点として、そして、その外のさらに東南アジア、とくに重点は蘭領東インドですけれど、そちらの方面に進んでいくという考え方が急速に浮上してくる。だから、そこで日本にとっての「東南アジア」という概念が形成されてくるというわけですが、そのときに南洋群島を「内南洋」といって、現在の東南アジアを「外南洋」とよんだ。おそらく、これは、日本人が南洋群島を自分の「ウチ」だと思ったんじゃないか、というふうにわたしは考えております。いっぽう、外国が支配している東南アジアを「ソト南洋」とよんだ。おそらく、そういうことなんだろうと思いますけれども。したがって、南洋群島の領有というものは、「東南アジア」という概念をつくりあげるうえで、非常に重要な役割を果たしていた。当時の地理の教科

書なんかをみますと、ミクロネシアを領有したからには、いままで大洋州というのはぜんぜん別に教えていたけれども、大洋州を地理の授業で教えるときには、日本のつぎに教えればいいんだというところを書いているものがあるんですね。日本の一部としてミクロネシアを教えていいんだと、そういうときがきたと、こういうふうなことを書いている教科書さえあります。ですから、そこには南洋群島というものを日本がとったことによって、太平洋の一带および東南アジアという地域に対する、なんといいますか、ウチ意識というものがでてきた。しかし、まだ東南アジアは、事実上はまだ外国の植民地でありますから、これを区別するときは「ソト南洋」といって区別した。と、こういうことなんじゃないかなというふうに思っております。

(司会：青山) よろしいでしょうか。ここで、まことに残念なんですけれども、時間がきまして、これ以上遅れますと、ひょっとして飛行機に乗り遅れる可能性もございます。それでは清水先生、波多野先生おふたかたは、これで終らせていただきますので、皆さん拍手でもってお送りください。どうもありがとうございました。・・・つづきまして、早瀬先生が残っておられますので、ひとりで総合討論というのは、非常に不思議ない方になりますけれども、存分に質問していただければと思います。時間はだいたい20分から30分はございますので・・・どなたでも結構です。早瀬先生には、フィリピンを中心にして、かなり突っこんだ話をしていただきましたので、いろいろな角度から質問ができると思います。どなたでも、どうぞ質問もしくはコメントを・・・

(フロア：桑原) 鹿児島大学教養部の桑原です。ホセ・リサルが日本に来たということですが、日本滞在中のホセ・リサルにまつわるいろんな話がありましたら、聞かせていただきたいのですけれど・・・

(早瀬) さきほど半分冗談で、ことばを早くマスターするには恋人を見つけることだ、と申しましたが、ホセ・リサルは亡命中に、世界を転々としまして世界中に恋人がいて、ドイツ語とか、フランス語を瞬く間に覚えたというんです。日本でも、旧水戸藩士の娘で、おせいという人が、彼の通訳をして箱根とか日光とか、いろいろ案内しました。ホセ・リサルの生家は、マニラの郊外ラグナ州カランバにあります。いま博物館になっていて、日本での恋人おせいということで、肖像画がかかっています。

日本にも、日比谷公園にホセ・リサルの生誕100年の碑があるんです。横浜の山下公園には、フィリピン革命のあと、日本に亡命してきたリカルテ將軍の像があります。リカルテ將軍は、戦争中、日本軍によってフィリピンに引き戻されて、宣撫活動にさんざん利用された人です。フィリピン革命と日本というのは、こういう碑があることから密接な関係があったことがわかります。

(司会：青山) ちょっと補足質問ですけれども、その碑というのは日本側が作ったんですか。そ

れとも、フィリピン側が日本に持ってきて作ったんですか。

(早瀬) 実は、それも問題なんです。日本側が作ったものです。リサールにかんしては、世界的に有名だということで、リサール関係の財団みたいなものが世界的にありまして、フィリピンにはリサール騎士団という大きな団体もあります。日本にも、フィリピン協会というのが戦前からあって、歴代の会長が岸信介や福田赴夫などで、ちょっと政治的に絡んでくる問題があるんですが、そういった日本とフィリピンの友好団体があります。こういう歴史的な日比関係のうえに、1961年にリサール生誕100年を記念して、リサールが訪日のさいに投宿した東京ホテル跡地に近い日比谷公園に記念碑が建てられたのです。その後、この記念碑を建てた日本リサール顕彰会は、外務省所管の社団法人日本リサール協会に改組され、会長に東龍太郎元東京都知事や大来佐武郎が就任しました。このようにフィリピンと日本との関係は、官民ともに根深くあるわけです。

(司会：青山) おもしろい話ですね……。ほかにございませんか。

(フロア) さきほど棄民という話ができましたけれども、最近、棄民の研究っていっぱいみられるようになったんですね。テレビでも、たとえば、中南米あたりの移民が棄民だというようなことで、マスコミでも取りあげられてきたんですけれど、フィリピンにおける棄民と、それから最近でてきた棄民といわれる人たちのあいだに、性格の違いというのはあるのでしょうか。

(早瀬) 戦前と戦後については、非常に大きな違いがあります。戦前の外務省の公式用語でいいますと、「移民」ということばは、わたしたちが現在使っています「海外へ永住または半永住を目的としてでていく人たち」を指しません。戦前の、とくに明治29年に施行された「移民保護法」による移民といえますのは、海外出稼ぎ労働者のことを指しています。したがって、戦前にでてくる「移民」ということばは永住的な意味ではないということです。それが昭和になって、中南米への国策移民、満州への国策移民というものがでてきまして、その移民ということばの性格が変わってきます。それが戦後になって、きょうわたしが申しました暗いイメージを払拭するために、「移民」という公式用語がなくなりまして、「移住者」になります。どこが違うんだといわれれば、ちょっと困るんですが、「移民」ということばは、外務省用語にはもうすでに存在しないということです。

現在、棄民ということばがでてくるのは、これはちょっと政府批判になるんですが、戦後における中南米への移住地選定における甘さというものが多分にあって、移住地を転々としなければいけなくなった人たちが大勢います。それでも1980年ぐらいまでは、なかには成功者がいたんですが、80年を過ぎてから中南米の経済が破綻しまして、移住地を離れざるをえなくなってきています。そのようなとき、日本のバブル経済の労働者不足のなかで、日系人が特別扱いされて、日本企業が雇えたので、日本に大量にやってくるということになりました。このように日本を離れた人が、また

戻ってくるという状況に追いこまれていることから、戦後の移住政策に対して、失敗じゃなかったのか、といわれるようになっていきます。

話は変わりますが、清水先生とか波多野先生の議論とも絡めてきちんと話しておかなければならないことがあります。きょう、「南方関与」ということで話をすすめています。さきほどの田島先生からの質問でも、「南進論」とか「南方関与」とかいろいろ用語があっってはっきりしないと。きょう、清水先生、波多野先生という、理論的に日本を代表されるふたりの研究者をお迎えして、きちんとした枠組みのなかで話をしてくださったので、わたしのほうから改めてということもないのですが、その「北方」と「南方」の絡みでみますと、これはずいぶん違ったものがあります。移民政策の絡みでいいますと、南方への移民は満州移民など北方への移民の補助的なものとしての意味が非常に大きいんです。フィリピンのダバオに比べると、補助金など、かなり違います。「南進論」が国策の基準として登場しますのは、昭和11年の8月です。ですから、かなり遅いんです。北進論はご存じのとおり、朝鮮併合の前からでてきている論理です。これは、早くから陸軍の主流となった論理で、朝鮮から満州、満州から中国大陸へ、そして中国大陸を南下というのが昭和になってでてきます。それに対して「南進論」というのは、具体的な国策として登場するのはかなり遅い。しかも「南進論」がでてきたあとも、その根幹は「北」だった。たとえば、戦争が勃発して4か月後に陸軍省軍務局長加藤長中佐という人が、「南方軍政建設の基本方針」というのを発表しますが、そこでいっていることは、「わが国防の基礎は常に日満支にある。南方開発に当っても常に日満支と睨み合わせて、これとの調和を保ちつゝ、経営することが絶対に必要である」というふうな、「根幹は日満支」ということを強調しています。つまり、「南進」は付録だといっているのです。

それなら、なぜ「南進」しなければならなかったのか。きょう最初の「趣旨説明」のところで、戦争がなぜ起こったのかということをおき詰めなければいけないということをおいしましたが、平和を愛し、平和と唱えていれば戦争が起らないというのは、なんの意味もない議論です。みんなかつての戦争も、いま起こっている紛争も、平和のための戦争が大半です。ですから、平和を愛し、平和を唱えているだけでは、戦争抑止力にならないんです。

なぜ太平洋戦争にいたったかということのひとつに、海軍のセクショナリズム、これは日本だけではなく、相手のアメリカをも含みますが、セクショナリズムによる利権争いがあります。太平洋戦争は、アメリカの海軍に予算がつくというところからはじまります。アメリカも陸軍が強くて、海軍が予算獲得のために仮想敵国日本というものを日露戦争のときにたてます。アメリカにとって日本は仮想敵国ということで、地図上に日本の部分をオレンジ色に塗ったことからオレンジ・プランといわれます。そのときから、延々とアメリカ海軍は予算を増やすために、日本との戦争の危機論を唱えます。それに対して、日本の海軍が昭和10年代になってから応えるんです。日米双方の海軍がお互いに予算を獲得したかぎりは、戦争しなきゃいけないということで戦争したのが、日米太平洋戦争のひとつの原因です。普通ならば、こういうセクショナリズムを潰すもっと大きな力が働く、大局的にみる目がでてくるというのが本当なんです。ところが、そのときにはセクショナリス

ムがそのまま通ってしまって、予算消化のための戦争がはじまるというばかげたことが、現実におこってしまったわけです。ちょっと極端な話し方をしていますが・・・。「南進論」「南方関与論」とかの論理ではないところで、つまり理屈ではないところで、現実には動いているところがあるわけです。

南洋群島との絡みでいいますと、南洋群島には移民政策によって、南洋群島の島民より多い日本人の移住者が、すでに昭和10年には存在していたのです。これはもう日本主体の領土で、「三等国民」と蔑称された島民に対する配慮をしながら政策する必要はなかったわけです。そこは、拓務省の管轄であって、日本のために開拓する場所であったのです。台湾総督府、朝鮮総督府、それに次ぐ地位が南洋庁に与えられます。その南洋庁の下に、戦争中には占領地として「大東亜共栄圏」が入ってくるという序列ができますが、あくまでも最終的に陸軍が主張して国防の基幹となったのは日滿支であります。そのような状況のなかで、「南方関与」とか「南進論」をどう捉えるか、やはりきちんと議論していかなければいけないことだと思います。ですから、「南進論」のほうが中心、われわれは南に関心があって「北進論」はどうでもいいんだ、というようなことでは議論できないと思います。

(司会：青山) いまの移民についての話、それからあと、北進論と南進論とを対比して、そのいろいろな違いというものを指摘され、非常にいろいろな面で話が広がったと思うのですが、それにかんして関連するようなご質問、コメント等ございませんか。

(早瀬) 肝心なことをいい忘れていました。さきほど満州への補助金はたくさんあるということをしていましたが、昭和4年の隈川八郎という慶應義塾大学の教授がフィリピンを視察した報告書『比律賓ダバオ州に於ける邦人産業調査報告』(台湾総督官房調査課)にこういう話がでています。当時南米ブラジルへの移民の補助金というのは、ひとり当たり渡航費が200円および保護費約50円、両方合わせてひとり当たり約250円です。それに対してボルネオ島タワオの日本人の植民地の補助金というのが、340~50名に年額約3万円。ひとり当たり90円弱で、ブラジルに比べて約3分の1になります。ところが、すでに昭和4年ですと、人口1万人を数えたダバオに対する補助金がひとり当たり2円しかないのです。民間主導で国策移民とならなかったところでは、たとえたくさん日本人が住むようになって補助金がほとんどだされていないのです。これではあんまりだという報告になっています。たくさん住む、住まないという既成事実の問題ではないということです。さきほど戦争中にフィリピンの在留邦人というのは、あまり重きをおかれなかったとていましたが、その前から補助金なんかの面で見ますと、重視されていなかったということです。

(司会：青山) ちょっとおうかがいたいんですけど、とくになにかフィリピンが無視されるとかというような理由はあったんですか。

(早瀬) 無視されるというよりは、アメリカの存在があったから自由にできなかったということです。さきほど明治期の「南進論」でも、結局、国粋主義者とか国家主義者といいいながら、欧米の支配の弱いところへどんどんでいくということがありました。ボルネオの北あたりだと、イギリスの支配とかオランダの支配があまり強くないところだから、日本が補助金をだして、そういったところを植民地にする、あるいは漁業開発をしてシーチキン、マグロの缶詰工場とかをすることがありました。しかし、フィリピンの場合は、やはりアメリカの存在というものがあって、気を使いながらやったという結果だと思えますが、在留邦人にとっては非常に不満であり、国家から見捨てられているというような印象を受けるのは当たり前だろうと思います。

(司会：青山) ほかにございませんか。とくにフィリピンにかぎる必要もないと思います。東南アジア一般でも・・・はい、後ろの方。

(フロア：川北) 鹿児島経済大学の川北と申します。さきほどフィリピン革命の話に関連して、その後、陸軍がずっとスパイをフィリピンに派遣していたというお話があったと思うのですが、そのことは陸軍の南方政策を形成するにあたって利用されたとか役立ったとか、そういうことはあるのでしょうか。

(早瀬) それがわからなくて苦しんでいるんです。わたしがいまもっている資料では、まだ充分整理しきれてないのですが、1910年前後つまり明治の終わりあたりに、日本のスパイ活動をスパイしていたフィリピンにいたアメリカの諜報機関の記録が数千枚あります。そこでは、マニラの日本領事館がそういう諜報活動で果たした役割り、軍から送られてきた人、そして、その工作員が在留邦人をいかに使って情報を集めていたか、そういう記録がでできます。それは、アメリカ側の記録です。ところが、日本の防衛庁などにはそういう記録がないんです。わたしたち歴史家というのは、カウンターチェックをしないと、つまりアメリカ側の資料、フィリピン側の資料、日本側の資料をつきあわせてみないと、客観的な分析ができないのです。それがなかなかできないんです。日本のスパイが実名ででできますが、大正以降も10人ほどの人が確認できてます。千葉大学の秦郁彦先生が『日本陸海軍総合事典』（東京大学出版会、1991年）というものをだしていますが、そのなかに戦前に南方方面に陸軍が送った諜報部員、つまり軍事工作員将校のリストがでていまして、東南アジア各地へ50人くらい、フィリピンに10人ほどの名前があがっています。それから、フィリピンの場合、大正13年から陸海軍の軍医が熱帯風土病研究のためと称して、マニラに駐在しています。陸軍では大正中期に年度作戦計画にフィリピン進攻が加えられてから、フィリピンに将校の長期滞在が実施されていまして、変名とか変装をしていまして、そういった人たちが実際戦争になって、電気屋の親父が実は将校だったとか、そういう話がワッとでできました。どこまでこのような工作

活動が、その後の軍政にいかされたのか、あるいは台湾総督府がかなり絡んでいたこともわかっていますが、それがどこまででてくるのかははっきりしたことはわからないというのが現状です。

ただひとつわかっていることは、フィリピンの占領地だと和知鷹二少将が第14軍参謀長になりますが、台湾から来た人で、台湾とのかかわりがあったこと、その一方で、開戦間近になってきますと、南方の占領軍政の準備のために、将校クラスを満州へ派遣したということです。つまり、満州統治というお手本を学んで、フィリピンなり、オランダ領東インドなり、英領マラヤなりへ行って、満州での統治方法を参考にした軍政を行なったということです。そういった満州で学んだ組と、台湾総督府を中心とした諜報活動と、どう結びつくのか、具体的な資料があまりないんです。ですから、いろんな逸話とか元兵士の話とかでポロポロでてるだけで、まとまってそれが実際に「大東亜共栄圏」のなかでどういかされたのかわからないんです。しかし、実はわからないということは、あまり役にたたなかったんじゃないかとも考えられます。つまり、軍事占領的なものについてはかなりやったけれども、わたしがきょう話したような軍政をはじめからの経済政策とか、人心把握とかいった面については、あまり役にたたなかったのではないかというのが、実際じゃなかったかというふうに、わたしは思っています。

(司会：青山) いまのでよろしいでしょうか。あと1名、もしくは2名、質問をお受けしたいと思うのですが……もうひとりいかがですか。

(フロア：新田) 植民とか移民とかという場合に、たとえばフィリピンなんかには日本人がたくさん行ってますけれども、そういうとき、植民地の宗主国の政府との法的な関係などどういうふうになっていたのでしょうか。

(早瀬) アメリカの植民地であるフィリピンでは、本国アメリカの法律が適応されます。日本の移民といたら、ハワイの移民とか、アメリカ西海岸の移民を思い浮かべる人がいると思いますが、そこでも摩擦があって、日米紳士協定の移民規定、移民法が制定されます。それらの法律は、全部フィリピンで適応されるんですが、それは数年前のバブル時代の日本の状況と同じことになります。つまり、違法であろうがなんであろうが、労働の需給関係が成立しますと、外国人労働者は違法といわれながらどんどん入ってきました。それを取り締まることを、政府はやりませんでした。アメリカの植民地フィリピンにおいて、労働者不足というのが領有当初、日本の明治時代最後の10年間にあって、植民地開発に必要な労働者は、違法である契約移民であろうが、誰であろうが入ってくるというような現実がありました。大正時代からさかんになる、きょうお話ししたダバオのアバカ(マニラ麻)栽培農民にしても、明らかな契約移民であって、不法労働者です。ですから、いつ取り締まりをされてもおかしくないわけです。ところが、ダバオの日本人麻栽培農民が作った麻でいちばん儲けたのは、アメリカの製網会社なんです。そのマニラ麻を原料としてロープを作る、アメ

リカの製網会社がまずほぼ独占的に儲け、その前の輸出入業者、これもアメリカがかなり押えていて儲けた。つまり、不法移住者で不法滞在であった日本人農民の働きによって、アメリカの産業が発展することで、不法性というのは見過ごされたわけです。アメリカの法律が適応されていれば、ダバオの日本人の活躍はなかったのです。わたしも最初ダバオのことを調べはじめたときに、アメリカの植民地のフィリピンで、なぜ日本人がこんなに発展するんだ、そんなばかげたことはありえないというのが、わたしの研究のそもそもの原点です。そこにはいろいろな法のからくりとか、需給関係というのがあったということです。

（司会：青山）ありがとうございました。ほかにございませんようでしたら、これで早瀬先生との総合討論も打ちきらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。・・・きょうはいろいろと波乱にとんだシンポジウムになりましたけれども、これで本日のプログラムの総合討論を終りたいと思います。